



Title	日本の動物園来園者の動物観に関する研究 : 来園者の娯楽の種類と変容に着目して [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	平, 侑子
Citation	北海道大学. 博士(観光学) 甲第13983号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/78330">http://hdl.handle.net/2115/78330</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yuko_Taira_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：平 侑子

審査委員	主査	教授	山	村	高	淑
	副査	教授	山	田	義	裕
	副査	准教授	金		成	玫
	副査	名誉教授	宮	下	雅	年

## 学位論文題名

### 日本の動物園来園者の動物観に関する研究

— 来園者の娯楽の種類と変容に着目して —

本論文は、日本の動物園における来園者の動物観に着目し、そうした動物観が娯楽とどのように紐づいて構成されてきたのか、そして時代によってどのように変容してきたのかを、緻密な文献調査・事例分析を通して論じたものである。具体的には、近世の動物見世物に関する過去の文化史的研究および記号論的研究の分析、大正から昭和初期にかけての動物園関係者による論考ならびに民衆娯楽論の分析、近世見世物興行から動物の演芸、近年の動物園常連の動向に至る具体的事例分析を通して、大きく以下二点を明らかにすることに成功している。

第一に、日本の動物園における娯楽は、歴史的に大きく2種に大別できることを明らかにした点。すなわち、動物園側から提示される休養・回復を意味するレクリエーションと、来園者自らが支持した近世の見世物的見方・動物の演芸・動物の個を見守る楽しみ方、の2種である。この点については、前者は管理・教化的な娯楽である一方、後者は再生産という目的から離れ、積極性・社会性を有した民衆による娯楽であると特徴づけている。さらに、来園者もこれら双方の娯楽のあり方に基づき、2種の動物観を有しており、これら2種の動物観が互いに影響を与え合うことで、緊張関係を保ちながら併存する構造が存在することを明らかにしている

第二に、こうした来園者における2種の動物観の緊張関係構造が、近代以降、どのような変容を辿ったのかを明らかにした点である。具体的には、「視覚のカタストロフ」を求める姿勢が1970年代を境に急速に減少していった一方で、動物と人間の「境界性」については、境界を際立たせる見方から、曖昧にする見方へと、境界の混乱を伴いつつ変化してきたことを明らかにしている。そのうえで、こうした境界混乱については、依然として子ども動物園における境界性や、動物園常連による動物の個に対する共感や理解に、見て取れると指摘している。

審査委員会においては、本研究のこうした成果は、以下の四点から学術的に独創性があり評価し得るものであるとの評価がなされた。すなわち、

第一に資料価値の高さである。近世の見世物から近代動物園の成立にかけての歴史的な資料を丹念に収集・整理したこと、円山動物園をはじめとした日本の動物園の実地調査・参与観察を通して現在の動物園常連の動態を明らかにしたことは、既往研究にはない資料価値を有している。

第二に、動物園に求められる機能のうち、既存の動物園研究において研究が手薄であった「レクリエーション」機能に焦点を当て、この機能の出所を探ることを目的として、近代動物園が成立しつつある時代に関する文献を精査した結果、それを民衆娯楽論の議論と接続できる点を発見した点である。この点は、これまで軽視されていた動物園のレクリエーション機能に関する議論に一石を投じる、学術的に重要な貢献である。

第三に、動物園の「娯楽」が、動物園側が機能としてあつらえた「レクリエーション」と動物園来園者が自ら見出したものに分かれることを示し、その二つが動物園の黎明期から現代に至るまで、ある種の緊張関係を持ちながら併存していることを論じた点である。この点はオリジナリティの高い課題設定を、経験的議論を含め、独自の切り口で論じることによって一定程度まで成功しており、高い独創性を有する点として評価できる。

そして第四に、近年の「動物園常連」の現象について、動物園来園者の求めているものが「種」から「個」へと変化しているという独創性の高い仮説を立て、豊富な事例分析を通して実証的に議論を展開することに成功した点である。

一方で、審査委員会においては、本論文の限界性として、大きく以下の三点について指摘がなされた。すなわち、第一に、動物観について、それがどのように変遷したのかを時代を追って記述することには成功しているものの、なぜ変容したのか、その社会文化的背景の考察については十分に展開できなかつた点。第二に、動物園来園者とはそもそも何者なのかという点について調査・整理が不足しており、主体論が構築できなかつた点。そして第三に、「レクリエーション」と「娯楽」という概念に着目しているものの、研究の結果を踏まえて、これらを再定義し独自性の「レクリエーション」論、「娯楽」論を展開するところには至らなかつた点、である。

このように、今後の課題をいくつか残している部分は否めないが、本論文は博士論文として十分な水準を満たす質を持つものであり、提示された知見や考察結果は、今後の動物園研究ならびに動物観研究、ひいては観光研究における余暇・娯楽研究分野に、新たな視座を先駆的に提示したものとして、高く評価され得るものである。

以上を踏まえ、著者は、北海道大学博士（観光学）の学位を授与される資格があるものと認める。